



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	現場実習を通じた学生達の学びの考察：自らを「みつめる」作業を中心に
Author(s)	齋藤, 真宏
Relation	日本教師教育学会第17回研究大会. 平成19年9月29日～平成19年9月30日. 鳴門教育大学、徳島県鳴門市.
Issue Date	2007-09-29
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/39980
Type	conference presentation
File Information	saito_JSSTec17.pdf



現場実習を通じた学生達の学び の考察 —自らを「みつめる」作業を中心に—

日本教師教育学会
第17回研究大会（2007.9.29）
於 鳴門教育大学

1. 旭川大学「教職セミナー」の目標

生徒と教師の「共生」に向けて、学生に学んで欲しいものは「変わる力」

→「変わる」経験の提供・・・「教職セミナー」の目標

2. 教職セミナーの概要

(1) 「教職セミナー」の概要

- ① 現場実習実施校：公立（5校、うち中学校2校）、私立高校（2校）

※母校実習が3名（公立高1名、公立中1名、私立高1名）

- ② 実習内容：授業補佐（社会科および商業科）、授業参観、部活動指導、ホームルーム／学活指導
- ③ 実施形態／内容：学校および指導教員によって異なる。実習校の指導教員と学生が面談をして決定した。
- ④ 実施時期：通年科目（4単位）で実施し、実習時間は年間で30時間を基準とした。
- ⑤ 講義形式：年10回の講義（実習報告、教育問題に関するディベート／ディスカッション）

(2)実習日誌について

- ①実習日誌は各学生が記入
- ②中学および高校の指導教員が必要に応じてコメントを記入、捺印
- ③学生が大学教員（筆者）に提出
- ④大学教員（筆者）がコメントを記入、返却

(3)「教職セミナー」を実施するに当たっての懸念材料

- ① 学生達の現場実習が実習校の先生方の業務の支障になる**
- ② 双方とも初めての経験から来る戸惑い**
- ③ 実習校における学生の役割が明確に出来ない**

3. 学生達の学び

(1) 学生 A の学び

- ① 実習内容: 障がいを抱える生徒や児童と共に遊ぶこと、および日常生活（歯磨きや食事指導）の補助
- ② 実習目標：「コミュニケーション力」を磨く
- ③ 実習で得たもの：必死に自分の弱点とぶつかってもがいた経験

(2)学生Bの学び

- ①実習内容: 主に授業参観
- ②実習目標: 今ある教師像と現実のギャップを理解する
- ③実習で得たもの: 自分の意識の甘さに気づいたこと、自分なりの教師の役割に対する考えの深化、「理想と現実のギャップ」に対する自分なりの対処法

(3)学生Cの学び

- ①実習内容: 主に授業参観
- ②実習目標：教師がどのように生徒の気持ちを把握しながら指導をしているかを学ぶ
- ③実習で得たもの：「高校時代には何も感じなかった事」に気付き、教育実習に向けた「自分なりの課題」を見つけたこと

(4)学生Dの学び

- ①実習内容: サッカー一部の指導（コーチ）
- ②実習目標：サッカーを生徒に教える技術を学ぶ
- ③実習で得たもの：「自分の指導のレベルアップを図らないと生徒のレベルもある程度の成長しか出来ない」（＝自分のサッカーに対する姿勢が「何気ない」ものだったことに対する気づき）

4. 学生たちの学びの総括

(1) 学生たちが得たこと
「変わる」経験の獲得

(2) 学生達の指導を通じて気がついたこと

実習日誌における多い抽象的な表現、抽象的な反省

→ 学生たちの「不十分」な現実への肉薄

5. 現場実習校教員からの評価

(1) 学生の学びについての評価

真面目さや意欲→高い評価

※教師としての知識不足、常識不足、意識不足等の
厳しい指摘

(2) 「教職セミナー」に対する感想・要望

大学生を実習生として受け入れることによるメリッ
ト及び学生時代から現場に触れる意義→評価

※この教職セミナーの運営の仕方が学生の成熟度に
あっていないという厳しい指摘

→高校／中学教員と大学教員（筆者）の「協働」を
成し遂げるかが大きな課題

6. 2007年度に向けた課題

- ① 現場実習校教員との「協働」体制の確立
- ② プロジェクト学習方式
- ③ 事前指導
- ④ 個別指導の徹底